

日本声楽発声学会

学会通信 39号 2018年（平成30年）3月発行

会員の皆さま

たび重ねること学会通信は39号となり、今年度最後の通信となります。いくつか連絡事項が出来ました。通信の全体をお目通しください。

2018年3月発行の第9号の学会誌『声楽発声研究』への諸々の投稿はすでに終了、編集委員会は印刷に向け縷々その掲載原稿の整理中です。理事会は、2018年5月の例会、総会のためのいくつかのお知らせや、新年度（2018年度）の恒例行事の5月、11月の例会、夏季研修会のプログラムの企画、お招きしたい講師の方々への依頼等、日々奮闘中であります。会員の皆様の活発な研究発表への応募も心待ちにしております。

昨年第53回総会（2017年5月28日）では、理事会から予告として主な条約を挙げ、諸規程改定の心づもりをいただきました。主な条約改定箇所は、会長、理事の選出方法です。

本学会は全国ネットで広範囲に会員が集う集団であります。全員の動向を把握できない難しさがあることから、会長、理事の2本立ての選挙にての選出には無理があることが分かりました。

今回第54回総会（2018年5月27日）では、会員の皆様からのご意見も反映して、元に戻し、理事の選出のみに絞り、その選ばれた理事の中から互選により会長を選出する方法を総会で問うことにいたしました。多くの会員の皆さまのご出席をいただき、本学会の組織が円滑に進みますよう忌憚のないご意見を頂きたく存じます。

またこの1年も意義ある研究課題を見つけ、本学会内外の方々の、研究発表や講座を用意し、旺盛に皆さまと共に研究していきたく存じます。

実践者は、見えない体の中の感覚と聴覚を頼りに音声や音楽を作らねばなりません。学んだ科学の知識を信じて技術の訓練を積み重ね、積み重ねた分だけその効果は表れることを実感として思うこの頃です。芸術文化は、政治や経済にややもすると翻弄され左右されがちですが、紆余曲折の中でも根強く生き残って、尽きない文化研究の探求のための活動は失なわず、発展に向かう強さがあるように思います。多方面から素

晴らしい講師や本学会会員からの科学知識や実践成果の発表等、皆さまと共に広く深く知識を得て、研究を深められることを願っております。5月例会、夏季研修会、11月例会のイベントに万障繰り合わせ是非ご参加ください。

2018年3月 会長 永井和子

1. ご寄稿

佐々木行綱先生を偲ぶ

1926.3.14 - 2017.9.6

山形忠顯

元日本声楽発声学会会員
公益財団法人東京二期会会員
上越教育大学名誉教授

去る2017年9月6日、敬愛する佐々木行綱先生が91歳で永眠された。共に声楽の道に生きる者として私達を見守り、励まし、導いて下さった先輩を喪い、洵に哀惜の念に耐えない。此処に忘れ得ぬ先生の履歴・業績を辿り、ありし日の面影をお偲び申しあげる。(乞許 敬称略記)

〈プロフィール〉

声楽家・バス。音楽評論家。オペラ演出家。元山形大学教授。

1926.3.14 東京生まれ。

父 佐々木英(すぐる) 音楽教育家・作曲家 1916 東京音楽学校甲種師範科卒

1944-1948 東京音楽学校声楽科 / 木下保、中山悌一に師事

1948-1950 同研究科 / 柴田睦陸に師事

1951 芸大歌劇研究部公演《ファウストの劫罰》(日本初演) ブレンデル演唱

1952 二期会旗揚げ公演《ラ・ボエーム》 巡查部長演唱

1952 プロオペラグループ合同公演《フィガロの結婚》(日本初演) バルトロ演唱

1953 二期会公演《オテロ》(日本初演) ロドヴィーゴ演唱

1954 二期会公演《ルクリーシアの凌辱》(日本初演) コラティナス演唱

1955 二期会公演《修禅寺物語》 金窪兵衛行親演唱

- 1955 二期会公演《魔笛》ザラストロ演唱
 1955 都民劇場《売られた花嫁》(日本初演) ミヒヤ演唱
 1956 都民劇場《薔薇の騎士》警部演唱
 1957 二期会公演《ドン・ジョヴァンニ》騎士長演唱
 1958 二期会公演《劇場支配人》(日本初演) フランク演唱
 1958 吉田昇プロデュース公演《アイダ》エジプト王演唱
 1958 都民劇場《夕鶴》惣ど演唱 / 1974 まで全国労音・海外公演含め 150 回余演唱
 1958 都民劇場《ペレアスとメリザンド》(日本初演) アルケル王演唱
 1959 東京労音《リゴレット》スパラフチレ演唱
 1962 二期会公演《真夏の夜の夢》(日本初演) シーシアス演唱
 1967 日生劇場《ジュリアス・シーザー》(日本初演) ニレヌス演唱
-
- 1963 東京芸術大学講師
 1967 山形大学助教授 / 1976 同教授 / 1992 定年退官
 1953-2017 二期会会員(理事含む)

〈 軌 跡 〉

顧みると、あの太平洋戦争(1941-45)を挟んで、1935-55年の20年間に日本の声楽・器楽演奏の変遷過程にエポックと言える状況があったと思う。端的に言えば、それはJ. P. ローゼンシュトック(1895-1985)の来日(1936-41、45-46、51、56-57)に由縁する。彼は新交響楽団(NHK交響楽団の前身)を育成・指揮し、わが楽界の向上・発展に多大の貢献をした。その深い音楽性に基く楽曲分析解釈、的確な演奏表現に、斎藤秀雄は「何と判りやすい指揮か」と感銘し、〈サイトウ・メソッド〉を築きあげ、名著《指揮法教程》を著し、秀れた指揮者を世界に送り出した。

声楽では、ローゼンシュトックの指揮の下で唱い、「良し」とされた柴田睦陸・中山悌一らは、「ローゼンシュトックの棒の洗礼を受けた」との矜持のもと、自分たちの音楽づくりメソッドを〈東京交声楽団〉等で追及していった(第1回発表会 1941.12.24 日本青年館)。

〈東京交声楽団〉第1回発表会の写真(石塚靖遺族所蔵)には、木下保・橋本国彦をリーダーに1936~41年卒の殆どの〈東音〉声楽科出身者による・日本初の専門声楽家の研究演奏集団で、石塚靖・村尾護郎・鷺崎良三・高木清・柴田睦陸・藤井典明・渡辺高之助・中山悌一・栗本正、山内(小澤)秀子・加古(小泉)三枝子・松本(藤島)紀久子・千葉(川崎)静子・佐々木成子たちの姿がある。

活動は太平洋戦争で中断するが、戦後、第二次の〈東京交声楽団〉が復活し、斎藤秀雄を迎えて厳格な訓練を受けて声楽技能を高めていった。

第二次〈東京交声楽団〉畑中良輔を代表に、石塚靖・菊池初美・林松木・平田黎子・須賀靖和・小田野正之・佐々木行綱・柳力・平田綾子・毛利順子・池谷寛子・中村浩子・岡部多喜子・平林深汐たちである。

このような楽界の状況において、戦後早々に〈東音〉を卒業した佐々木行綱は、新進気鋭の音楽家として〈東声〉の先頭に立って歌唱技能を磨き、ステージに立ち、オペラ公演に挑んでいった。当時は入場料には10割課税（1947年、48年15割、50年10割）という苛酷な条件であったが、戦後を「生きているのだ」という心情から湧きたつ「音楽する精神」と、荒廃した祖国日本の人々に「平和の歓び」を喚起したいという熱き願いからの活動であった。

また、佐々木は二期会に創設された〈研究生制度〉（音大卒業生をプロの音楽家に育成し、新会員として活動させていく）の仕事を担い、一方では、大学教官として学生の研究指導の仕事に精力的に携わっていった。その間に徐々に昂じてきた課題は、「如何に指導するか」ということであった。先輩の大教授の前で何をどのように唱うのか、指導されず萎縮している姿、特に「発声法」指導が等閑視されている実態に不如意の思いを募らせていた。

然し、やがて識者の間に「音楽発声法を共同研究する」団体組織を設けたいという気運が高まり、1964年10月、遂に〈発声指導法研究会〉が発足した。

城多又兵衛を理事長に、須永義雄博士、奥田良三、藺田誠一、下八川圭祐、市来崎義子、柴田睦陸、車田謁也、大熊文子、渡辺高之助、秋元雅一朗等、音楽界、音楽教育界の垣根を越えて、有為の人々によって立上げられた。1971年に〈日本音楽発声学会〉と改称し、全国の音楽界、音楽教育界に渡った公的な組織となり、「音声科学的見地の研究と音楽発声実践法」の追及、更に、音楽専門家のみならず広く学校教育現場における音楽発声指導法のあり方まで取上げられていった。

佐々木は〈発声指導法研究会〉の発足当初より柴田睦陸から強く協力を要請され、組織づくりと運営に尖兵として下働きを荷ってきた。全国の教育学部、教育大学、音楽大学から小・中・高等学校に情宣して、研究会・全国大会の開催、地方支部の設立、合宿研修が行われていった。木下武久、宮原卓也、森明彦らによる「フースラー研究」が取上げられ、充実した学会活動が確立した。

その後、佐々木は山形大学教授として定年退職(1992.3)に至るまで、戦後日本に積み残されていた「音楽科教員養成」の仕事に、永年の知識・経験を以て精力的に取り組む、斯界の課題の改善に尽力した。それは東京芸大に1955～66年に設置されていた「教員課程」、8大学の特音(特別教科教員養成課程音楽)、その他の教育学部、教育大学、音楽大学の教員養成課程におけるパースペクティブを欠く音楽科教員養成という過大な課題であった。

定年退官後は、音楽科教員養成に携る後輩たちの相談に応じ、また、二期会最古参会員としてその行末を見届けるべく、悠揚として余生を送っていた。

以上、図らずも此の追悼文を記させて頂いたが、最後に佐々木先生との思い出を綴りたい。

1956年、東京大学の「駒場五月祭」であった。佐々木行綱のバス独唱は、その昔、満州ハルビンの「キタイスカヤ」で聴いた〈ドン・コザック合唱団〉を髣髴させ、全身に戦慄を覚える思いで聴きいった。後にそれは《修禅寺物語》の金窪兵衛行親役を、朗々たるベル・カントで歌舞伎の大和ことばを歌唱する「名演」に止揚されていった。(CD VZCC-1043~5)

軽井沢での夏期合宿研修の終了後、後片づけのため、常に唯一人残って門頭に立ち、我々を見送っていた姿が今も眼に浮かぶ。

横浜市青葉区鉄町の「横浜あおばの里」にお見舞しては、いつも当方の課題に懇篤に答えて頂いた一方で、歌唱してお慰めする機会を逸した。《ロシア民謡》と《月の砂漠》とが念頭にあり乍ら、洵に無念である。

此処に、佐々木行綱先生のご生涯を偲び、衷心よりご冥福を祈念し奉る。



2. 平野実先生（本学会顧問）への追悼文

宮原卓也（本学会相談役）

平野先生は当学会でも講義されましたが、私が平野先生と知り合いになりましたのは、久留米大学耳鼻咽喉科の先生の教室を訪れた時からでした。

その後11年の間通い続けて昭和61年には、久留米大学より『医学博士』を授かりました。長き間、平野先生のご協力の元、共同研究を重ねてまいりましたが、結果、このような名誉をいただくことになったわけであります。

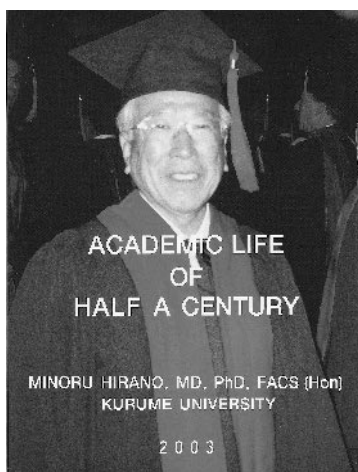
平野先生は、『発声学』の大先生であっただけでなく、先生ご自身の、自らの歌唱演奏も素晴らしいものでありました。

若い医学生で、歌の上手な先生方の殆どが、平野先生には勝てないとの評価でした。平野先生はアメリカに留学されましたが、そのアメリカでもヨーロッパでも、多くの著名なプロの音楽家と二重唱を行なっていたとのことでした。

謹んで平野先生の御冥福をお祈りいたします。



久留米大学医学部耳鼻咽喉科学教室開講記念会 教室開講60周年記念
平野実教授17周年記念 1988.5.14



60周年記念に参加された二期会テノール歌手 宮原卓也さん。久留米大学で研究をして日本で初めて医学博士となった歌手。

3. 日本声楽発声学会 2018年5月開催 107回例会・第54回総会のご案内

2018年5月27日(日) 107回例会 9:55~16:30

会場：お茶の水女子大学講堂（徽音堂）

A 研究発表 10:00~11:10

① 10:00 ~ 10:30 (質疑応答含む)

泉 恵得 (琉球大学名誉教授・声楽家・本学会理事)

テーマ： 音楽学的演奏学

② 10:35 ~ 11:05 (質疑応答含む)

永原恵三 (お茶の水女子大学基幹研究院教授・本学会理事)

テーマ： 歌唱における身体的思考

＜第54回総会 11:20~12:20＞

総会資料は当日配布いたしますが、会則、諸規程の改訂にあたり、改訂版を別紙にて同封しておりますので、ご覧ください。

なお、総会次第は同封の例会プログラムの7頁をご参照願います。

B 特別講演 13:00~15:00

講師：加我君孝氏 (かが きみたか 東京大学名誉教授)

講演テーマ：「声帯の発見の歴史と最近の人工喉頭インプラント研究までの歌唱に関連した医学の動向について」

歌を聴く喜び、歌う喜びは脳のどこで生じるのであろうか。恐らく大脳辺縁系の扁桃と考えられる。現在から4500年前のエジプトのピラミッドのヒエログラフには音楽演奏が描かれている。古代ギリシャではコロスという合唱団が演劇の一部を担当している。このように現在に至るまで歌の歴史は人類の歴史と同様に長い。歌手の職業病については18世紀の「職業と病気」に記述がある。声帯の病気を直接見ることができるようになったのは19世紀後半の間接喉頭鏡の開発による。現在は喉頭内視鏡で直接観察が可能になっている。喉頭癌で喉頭を摘出後も食道発声で歌うことが可能である。最近ではコンピュータにより歌の再現も可能になっている。片側の声帯の麻痺には人工喉頭インプラントによる制御が開発の途上にある。

C 現役声楽家の演奏とお話 15:20～16:20

講師：浜田理恵氏（はまだりえ ソプラノ）

ピアノ：三ツ石潤司（みついしじゅんじ）

演奏曲目

1. A. Parisotti 《Se tu m'ami もし貴方が私を愛してくれて》
2. G. Bononcini 《Per la Gloria お前を讃える栄光のために》
3. G. F. Händel 《Lascia ch'io pianga 私を泣かせて下さい》
4. G. F. Händel 《Bel piacereなんてすてきな喜び》
5. V. Bellini 《Norma ノルマ》より 〈Casta Diva 清らかな女神よ〉
6. G. Verdi 《Otello オテロ》より 〈Salce, salce 柳の歌～Ave Maria アヴェ・マリア〉

プログラミングの意味するところ

このプログラムは普通にいい音楽を聴いて楽しむためだけに組んだものではありません。美しい音楽ばかりですが、普段日本人とその他の国籍の方をお教へして、日本人に大きく欠けるものに焦点を集めました。

浜田理恵（ソプラノ）

東京芸術大学卒業および同大学院修士課程修了（中村浩子氏に師事）後、パリに留学、イザベル・ガルシザンズ氏に声楽を、イレーヌ・アイトフ氏にフランス歌曲を学ぶ。

1991年パリ市立シャトレ劇場にてデュカ「アリアーヌと青ひげ」（指揮 エリアフ・インバル）でオペラデビュー。UFA M主催国際声楽コンクールで第1位、およびディクソン、スペイン音楽賞、演奏技術賞を受賞。92年、第19回パリ国際声楽コンクールオペラ部門で第1位。国立パリバステューユオペラでオネゲル「火刑台上のジャンヌ・ダルク」をチョン・ミュンフンの指揮の下で歌い絶賛される。以降数々のオペラに出演。97年パリ市立シャトレ劇場にてフィリップ・マヌリーのオペラ「北緯60度線」世界初演にマリア役で出演。98年、トゥールーズ歌劇場にてステファノ・ランザーニの指揮でプッチーニ「ラ・ボエーム」のミミを歌う。以後、国立リヨン歌劇場で「ラ・ボエーム」ミミ、トゥールーズ、パリシャトレ劇場でランドウスキー「モンセギュール」、ドビュッシー「放蕩息子」（指揮 ミシェル・ブラッソン）、アヴィニョン（指揮 アラン・ガンガル）サンテティエンヌ（指揮 ロラン・カンペッローネ）で「トゥーランドット」のリュウ役、トゥール歌劇場でモーツァルト「ティトの慈悲」ヴィテリヤ役（指揮 イヴ・オッソンス）、グノー「ファウスト」マルグリット役（指揮 イヴ・オッソンス）など出演。

日本においては、びわ湖ホール・プロデュースオペラ ヴェルディ「ドン・カルロ」（総監督・指揮：若杉弘）エリザベッタ役、ヴェルディ「ジョヴァンナ・ダルコ」のタイトルロール、新国立劇場でドビュッシー「ペレアスとメリザンド」（指揮：若杉弘）、「カルメン」ミカエラ役（指揮：G.バルバチーニ）、「トゥーランドット」（指揮：A.アッレマンディ）リュウ役、東京文化会館 黛敏郎「古事記」アマテラス役（指揮：大友直人）、兵庫県立

芸術文化センター「蝶々夫人」タイトルロール（指揮：佐渡裕）などに出演。1997年出光音楽賞受賞。現在、お茶の水女子大学非常勤講師、フランス在住。

三ツ石潤司（ピアノ）

兵庫県生まれ、東京藝術大学作曲科卒業、同学大学院博士課程（音楽学）単位取得。アンリエット・ピュイグ＝ロジェ女史にコレペティツィオン、伴奏を学ぶ。その後ウィーン国立音楽大学に学び教育科、作曲指揮科講師を経て、同学で初めてのアジア人声楽科専任講師としてリート・オラトリオ科でエディット・マティス教授のアシスタントなどを務める。その傍ら、ウィーン、パリを始めヨーロッパ各地の劇場や音楽祭でコレペティートア、またロームミュージックファンデーション主催の音楽セミナー（指揮指導：小澤征爾）講師として活躍。現在は帰国して日本各地で、コレペティートア、伴奏者、作曲家として活動。伴奏法や演奏解釈を中心に後進の指導にあたっている。武蔵野音楽大学教授。東京藝術大学講師。長年の功績に対して2009年にオーストリア共和国功労金賞受賞。

4. 第108回例会における「会員による研究発表」の募集

《要領》

1) 第108回例会 — 2018年11月25日（日）午前中

A 研究発表 3発表（一人30分）

但し、2名の申し出があり、理事会の審議を経て決定しております。

あと1名ですが、日頃の研鑽の成果をご発表くださる方を募集します。

2) 研究発表規程は、学会誌『声楽発声研究 No. 8』の84頁に記載されております。未発表のものであることを原則として、例会発表希望の6ヶ月前に本学会に発表題目（テーマ）と概要をご提出ください。上記例会にご希望の場合は、5月中にご提出であれば可能です。

提出場所：日本声楽発声学会 事務局

215-0003 神奈川県川崎市麻生区高石 4-11-14-409

電話/Fax：044-577-2037

E-mail：info@jars-voice.org

5. 2018年8月に開催の夏季研修会について

以下の概要で開催を予定しておりますので、皆さまのご参加をお待ちしております。

日時：8月20日（月）、21日（火）

会場：日本福音ルーテル東京教会

◎ 8月20日（月）、A、B両講座とも2階礼拝堂

A講座 13：00～15：00 作曲家シリーズV

青島広志氏（作曲家、東京芸術大学講師）

B講座 15:20～17:20

移川澄也氏（声楽家・バリトン・フースラー研究家、東京藝術大学卒）

『うたうこと』(Singen) F. フースラー著（須永義雄/大熊文子共訳）の読み方」

◎ 8月21日（火）、C講座（1階会議室）、D講座（2階礼拝堂）

C講座 10:00～12:00 音声生理学講座

文珠敏郎氏（耳鼻咽喉科医・医学博士）

「臨床医の立場から、実証例、声を守るための一提言」

（声の悩みと向かい合って35年）

D講座 13:00～15:30

「歌の集い」第12回（出演者募集中。次項の応募要領をご覧ください。）

■ A講座 青島広志氏による公開レッスン受講者を募集します。

講師：青島広志先生 8月20日（月）13:00～15:00 於：礼拝堂

現代日本を代表する作曲家、青島広志氏をお迎えして、ご自身の作品を、自ら公開レッスンをしていただき、日本語の発語法や発声法、或いは表現法について学びます。

○特別に指定された課題曲はありませんが、青島先生からのお薦めとして

- ・《少女の季節》の中から何でも。
- ・《サド侯爵夫人》のルネのARIA
- ・《黒蜥蜴》の黒蜥蜴のARIA
- ・合唱曲集より2曲、自由に選択してください。

このあたりから如何でしょうか、とのこと。ピアノ伴奏者はご同伴ください。

○ソロで受講される方は2曲選んで下さい。歌曲とARIAの組合せでも結構です。

- ・申し込みは事務局にファックスかメールで行って下さい。
- ・申し込み締め切りは4月30日（月）まで。
- ・受講料は：ソロ 一人40分で、会員は4,000円。非会員は6,000円
合唱団も同じ40分で、会員は8,000円。非会員は10,000円。

なお、学会に伴奏者を依頼する場合は、一受講3,000円をお支払いください。

6. 「歌の集い」参加者募集

■ 第12回「歌の集い」演奏会の出演者募集につきまして

第12回「歌の集い」演奏会の出演者を募集いたします。既にお伝えしておりますと

おり、「歌の集い」は10回をもちまして一区切りとなりました。

第11回からの「歌の集い」は年に1回の夏季研修会時に併催いたしまして、新しい試みとして「レクチャー付き演奏」の枠を設けました。「レクチャー付き演奏」担当者については演奏研究のニーズに対応すべく、理事会で協議した上で理事会推薦・承認といたします。そして学生の研究・研修に対応する学術学会としての充実を図るため、出演枠に「学生」枠を設けました。

「歌の集い」の主旨は、会員の皆さまの日頃の歌唱研鑽の成果を発表して頂き、それを皆で分かち合いましょうというものです。他者からの批評は一切ありません。公開演奏会の歌唱体験の中で演奏者ご自身が何かには気づき成長の糧を見つける「場」として「歌の集い」は有益でありたいと考えております。

「歌の集い」の企画・運営、チケットチラシ作成、出演者報告については本学会演奏委員会が中心に行い、広報、チケット精算会計は、理事会管轄となっております。

本学会には傘寿をお迎えになった会員をはじめ、年齢につれて経験を重ねつつ意欲的に演奏活動をなさっていらっしゃる会員が少なからずいらっしゃいます。この事実は、歌うことが健康維持にプラスである証といえますでしょうか。「歌の集い」演奏会をご活用いただけましたら幸いに存じます。

ご応募を、こころよりお待ち申し上げます。

日本声楽発声学会理事会
演奏委員会

■ 2018年「歌の集い」募集要領

○ 応募要領のご提出はメール（資料添付可）でお願い申し上げます。

メールをご使用でない方はファックスでお受けいたします。

○ 募集人数に達し次第、締切りとさせていただきます。

【応募要領】

①お名前（漢字&ローマ字表記） ②ご年齢 ③ご住所 ④お電話番号（携帯電話番号も）・ファックス番号

⑤メールアドレス ⑥略歴（200～300字） ⑦ピアニスト名（漢字&ローマ字表記）と略歴（100字まで）

⑧演奏曲（原語と日本語/作曲者名/作曲者生年没年/作品番号/作詞者名/作詞者の生年没年/演奏所要時間）

・上記①～⑧を、下記本学会事務局まで、メールにて応募下さい。お問合せも事務局

へお願いいたします。

【応募先・問合せ先】 日本声楽発声学会事務局 安原道子

メールアドレス：info@jars-voice.org 電話とファックス：044-577-2037

○日程

2018年8月21日（火）午後 ※夏季研修会は8月20日（月）・21日（火）

○会場

日本福音ルーテル東京教会 礼拝堂

○出演者

- ・独唱及び声楽アンサンブル：3～4組
- ・学生：1組 ※卒業試験、修士試験の研鑽の成果が望ましい。

○演奏時間

1組 20～25分

○チケット

- ・1枚 2,000円
- ・1組 10枚を割り当てとし、11枚目からは1,500円を納めて頂きます。
- ・精算は、事前にお振込にてお願い申し上げます。止む終えない場合は当日受付にて対応いたします。

振込先：郵便振替口座：00170-0-119920 加入者名：日本声楽発声学会

○チラシとチケット

- ・本番の3～5ヶ月前に出演者にお渡しいたします。

○出演者の方にはプログラム掲載用お写真の提出、歌詞対訳及び曲目解説の執筆をお願いしております。

これらの詳細は、ご出演頂くことが決まりました後に、追ってご連絡申し上げます。

7. 会費納入のお願い

本学会の運営は皆さまの会費によって成り立っております。4月から新年度が始まります。基本的に5月の例会までに納入していただくことになっておりますが、もし、前年度まで未納の会費がある場合は、速やかに、下記口座に、お振り込みいただきますよう、お願い申し上げます。

振込先 郵便振替口座 00170-0-119920 加入者名：日本声楽発声学会

8. 会員からの案内等

豊田喜代美（本学会理事）より、以下の演奏会のご案内がありました。

■豊田喜代美ソプラノリサイタル「秋の瞳～木下牧子の世界」

日時：2018年11月18日（日）14時開演 13時半開場

場所：サントリーホール・ブルーローズ

共演者：木下 牧子（作曲家） 田中 悠一郎（ピアニスト）

チケット：自由席5,000円 学生3,000円（二期会事務局扱い）

発売日：2018年5月16日（水）

主催：豊田喜代美ソプラノリサイタル実行委員会

マネジメント：公益財団法人東京二期会

チケットお問合せ

- ・二期会チケットセンター：電話 03-3796-1831/FAX 03-3796-4710
- ・サントリーホールチケットセンター：電話 0570-55-0017

曲目

木下 牧子の新作

「秋の瞳」（八木 重吉 詩）より

- ・竜舌蘭
- ・空が凝視している

「六つの浪漫」より

- ・ほのかにひとつ 北原 白秋 詩
- ・風をみたひと C.ロゼッティ 詩/木島 始 訳

「抒情歌曲集」より

- ・うぐいす 武鹿 悦子 詩
- ・夕顔 金子 みすず 詩
- ・白いもの 北原白秋 詩

「涅槃」 萩原 朔太郎 詩

「愛する歌」（やなせ たかし 詩）より

- ・ひばり
- ・ロマンチストの豚
- ・きんいろの太陽がもえる朝に
- ・雪の街
- ・さびしいカシの木

9. 音楽学の窓から 第3回

永原恵三（本学会理事）

今号では、おそらく西洋近代の発声による声楽からはほど遠い「声」による音楽の研究を紹介します。ジェラルド・グローマー氏（山梨大学教授）による『瞽女うた』（岩波新書）です。日本の近世から幕末、明治期を経て、近代 20 世紀に至るまでの長い間、「瞽女（ごぜ）」と呼ばれる盲目の女性旅芸人たちが、関東甲信越などの各地で家々を巡り歩き、三味線の伴奏で歌っていました。近世以降の京、大坂、江戸などの都市で演じられた芸能の流行をレパートリーに入れて、門付け唄から長唄や浄瑠璃、民謡、流行歌、端唄、和讃まで広いジャンルをカバーしていました。また、現在のようないマスメディアのない時代に、都市の情報を届ける役目もあったようです。瞽女うたの史料を調べることから、瞽女を支える近世の社会、芸能をめぐる様々な制度、そして時代ごとの音楽芸能の流行など、日本の社会や文化が透かして見えるのは、興味深いことです。

文献：グローマー、ジェラルド 2014『瞽女うた』（岩波新書）、東京：岩波書店。

10. 事務局だより

事務局長 川上勝功

この一年は、春の第 105 回例会及び夏季研修会、そして秋の第 106 回例会が、ほぼ滞りなく終わりました。この一年の経過がこと更早く感じました。

5 月の例会では特別講演の講師に、当学会の相談役でおられる小林武夫先生をお招きし、『声はどのようにして作られるのか』と題して、お話いただきました。本学会理事の竹田数章先生、西浦美佐子先生のサポートをいただき、音声生理学者の強力なトリオで、私たちに非常に分かり易い解説をしていただきました。加えて、竹田先生から貴重な医療機器を用意していただき、勇気ある会員の方々の生の喉頭を覗き見ることができました。誠に感謝に堪えません。講演の詳細は、本学会の学会誌の報告をご覧ください。

8 月の夏季研修会は、イタリア人のテノール歌手、ニコラ・ロッシ・ジョルダーノ氏をお迎えいたしました。今回は、いろいろと教えていただきたい旨をお伝えしてありましたので、最初に一曲“Core'ngrato”を歌っていただきレッスンに入りました。演奏については、間近にイタリアの第一級のテノールの演奏を聴かせていただけたことで、会場からは大きな拍手と、あちこちから溜息が漏れてまいりました。レッスンにつきましては、本学会誌の報告の方をお読み下さい。

秋の特別講演には、今、日本のオペラ界で最も高い評価を受けておられる、演出家の中村敬一氏をお招きしました。“演技と発声についてのお話し”を、二期会オペラスタジオの研究生数名に演唱していただき、これまた非常に分かり易い解説を加えて下さり、深く実りのある講座となりました。詳細は本学会の学会誌の報告をお読み下さい。

『現役声楽家の演奏とお話』は、春には藤田卓也（テノール）さんと、秋には、今尾 滋（テノール）さんをお迎えし、それぞれが日本人離れした素晴らしい声で、それぞれの持ち味を聴かせて下さいました。詳しくは本学会の学会誌の報告をどうぞ。

もうひとつ、特筆すべき事項として、長年当学会の発展にご尽力下さいました、故米山文章先生や前述の小林武夫先生と並ぶ、相談役の山田 実先生が、夏と秋に、大変貴重な講演をして下さいましたことをご報告させていただきます。夏には、レクチャー講演として、お話しと、非常に若々しい歌声で、演奏も披露して下さいました。秋は、その続きと言うことで、“Pronunciation vs Diction”と言うタイトルで、30分間発表して下さいました。発表内容の大切さと共に、会場に来られた会員の皆さんは山田先生の若々しさにさぞかしビックリされたことと思います。あらゆる意味で経験豊富な大先輩であられる先生方から、多くの知識と智慧を頂けたことに関して、ここに小林先生と山田先生に心からの感謝を捧げます。ありがとうございました。

さて、最後になりましたが、事務局から会員の皆様にご報告せねばならないことが二つばかりあります。

ひとつは、ある会員から投稿された論文掲載に関して、『発声学会』に対する訴訟問題が起きてしまいました。昨年の11月によりやく決着が付きましたが、もともと裁判に掛けられるような問題ではなく、話し合いでいくらかでも解決できたはずのことでした。“ある手違い”で裁判にまで突入してしまったのです。多くの無駄な時間と、多くの無駄な労力、そして多くの無駄なお金を費やすことになってしまいました。当会員からは、3件に分けて訴えられていましたが、その内の『日本声楽発声学会』（理事会）には、落ち度がなかったことと理解していただけたようです。当会員もまだ当学会の会員であり、同じ音楽仲間なので、今後の『学会』とは上手く付き合っていただけることを心から願っております。

それともうひとつ、当学会の幹事でありました相川さんのこともご報告せねばなりません。相川さんは、米山先生が理事長でおられた頃に、会員となりました。いつの頃からか、私は彼と親しくなり、録音や録画についても、いろいろと教えていただき、沢山助けていただいております。幹事になられてからも、学会の多くの仕事を手掛け、発声学会にとって、いつしかなくてはならない存在になっていきました。

“ホームページ”の作製から運営、そして、“例会”“夏季研修会”“学会通信”の編集から発行と、大変な仕事を担って下さっておられました。加えて、例会や研修会当日の録音・録画も引き受けて下さっておられました。しかしある時、学会運営上の問題

で、相川さんと理事会の間で“ボタンの掛け違い”が生じ、いろいろと摩擦が生じて行きました。彼は自らの口で「自分は年に数回体調を崩すことがある」と私達に伝えて下さっていたので、もっと早くから丁寧に話し合いをしていれば、問題はこじれずに済んだのではないかと、今現在はそう考えております。そして今は、相川さんが、学会のために多くの時間を裂き、多くの労力と私費を投じて下さったことに関し、心から感謝を表わしたいと思っております。彼は、「これからは会員のひとりとして、勉強に専念します」と語っておられました。これまでの学会の運営の中で裁判等で無駄な出費を繰り返してしまったこともあって、相川さんには未払いであった機材の保管費5万円を学会基金に寄付をして下さいました。これはたいへん有難く、会計の方で適宜処置をして下さることと思いますが、会員の皆様にこのことをお伝えすると同時に、書面をお借りして、ここに改めて相川さんのご厚意に、心から感謝と御礼を申し述べさせていただきます。

日本声楽発声学会事務局（担当：安原道子）

〒215-0003 神奈川県川崎市麻生区高石4-11-14-409（安原）

E-Mail： info@jars-voice.org

Tel/Fax： 044-577-2037

日本声楽発声学会Webサイト <http://www.jars-voice.org/>

郵便振替口座 00170-0-119920 加入者名：日本声楽発声学会

11. 編集後記

学会通信第 39 号をお届けいたします。今号は本学会の歴史を刻まれたお二人の先達に感謝し、他方で、会則規程の改訂や夏季研修会、「歌の集い」などの新たな歩みをお伝えすることとなりました。なお、第 107 回例会・第 54 回総会は会場が、従来の東京藝術大学ではなく、東京メトロ丸ノ内線茗荷谷駅下車のお茶の水女子大学で開催されます。どうか、お間違えのなきよう、例会プログラムに添付の別紙をご覧になってお越し頂きますよう、お願い申し上げます。

広報・情報委員長 永原恵三

日本声楽発声学会

学会通信 第 39 号

2018 年（平成 30 年）3 月 25 日発行

発行者：日本声楽発声学会

編集者：永原恵三

印刷所：よしみ工産株式会社東京事務所

〒113-0033 東京都文京区本郷 3-26-1 本郷宮田ビル 3F